

# 花園中ノ平遺跡

—個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成31年1月

大田原市教育委員会



はなぞのなかのだいらいせき

# 花園中ノ平遺跡

—個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成31年1月

大田原市教育委員会



## 序

大田原市には、那珂川とその支流の簗川が流れ、両河川の間には那須野が原扇状地の平坦面が形成され、さらに両河川流域には河岸段丘、扇状地の扇央部や扇端部の各所には湧水が点在するなど、この地域特有の地理的な環境が見られます。

このような特異な環境によって、原始・古代から人としての暮らしを営むことが容易にできる地域として選ばれ、集落跡や古墳など、その時代その時代の人々の生活の痕跡が蓄積され、今日、埋蔵文化財という形で市内あちこちの地中あるいは地上に残されています。

本市では、これらの埋蔵文化財の所在を明らかにし、各種開発事業との円滑な調整を行ながら保護していくための基礎資料を整備するため、平成26年度から平成28年度まで市内全域を踏査して、平成29年度に『大田原市遺跡分布地図』としてまとめ上げました。これにより、市内で459ヶ所もの埋蔵文化財包蔵地が登録されました。

本書は、出来上がったばかりの『大田原市遺跡分布地図』に登載された埋蔵文化財包蔵地「花園中ノ平遺跡」内において計画された個人住宅の建設に先立って、記録保存のために実施した発掘調査の報告書です。同遺跡自体は広範囲に及ぶとみられておりますが、発掘調査の範囲はわずかであったため、確認された遺構や出土した遺物も限られ、遺跡の全容を知るまでには到底及びません。しかしながら、わずかな情報ながらも縄文時代の人々の生活がここで確かに営まれていたということを捉えることができたことは、今後同遺跡を保護していく上での重要な手掛かりとなりました。

本書が、市民の皆様が地域の歴史を理解する上での一助になるとともに、学術研究の基礎資料として広く各方面でご活用いただければ幸いです。

結びになりますが、発掘調査から報告書の作成に至るまで、多大なるご理解、ご協力をいただきました関係機関並びに関係各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成31年1月

大田原市教育委員会

教育長 植竹福二

## 例　　言

1. 本書は、栃木県大田原市花園字林前に所在する「花園中ノ平遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、個人住宅建設に伴うもので、大田原市教育委員会が主体者として実施し、同市より委託を受けた株式会社日本窯業史研究所が支援業務にあたった。
3. 調査は、平成30年6月12日から同年6月19日まで野外調査を実施した。整理・報告書作成は、同年11月16日から平成31年1月31日まで実施した。
4. 野外調査、整理・報告書作成作業とも大田原市教育委員会文化振興課長 長谷川 操を調査担当者とし、株式会社日本窯業史研究所 水野順敏、菅間智子が支援業務にあたった。本書の執筆は、第1章第1節を長谷川、他は長谷川の指導の下に水野が行った。編集作業は長谷川の指導の下に、水野・菅間があたった。

### 5. 調査組織

調査主体者・大田原市教育委員会

植竹 福二 教育長

木下 義文 教育部長

長谷川 操 文化振興課長

小林 理佳 主幹兼文化財係長兼市史編さん係長

関戸 正清 文化財係主査

小針 千佳 文化財係主任主事

山川 千博 市史編さん係主査

調査支援・株式会社日本窯業史研究所

菅間 裕二 代表取締役

水野 順敏 野外調査、整理・報告書作成支援

菅間 智子 整理・報告書作成支援

6. 出土遺物については、上野修一・木下 実両氏よりご教示を賜った。

7. 調査記録及び出土遺物は、大田原市教育委員会が保管している。

8. 野外調査から整理・報告書作成作業において、下記の諸機関・各位よりご指導とご助力を賜った。ご芳名を記して謝意を表する次第である。

栃木県教育委員会文化財課、(有)石崎建設、トヨタ・ウッドユーホーム(株)、(有)広興北関東、  
谷口武光・貴美枝、上野修一、木下 実  
(敬称略、順不同)

## 凡　　例

1. 本遺跡の遺跡名「花園中ノ平」の略号は、HNDとし、以下に土坑：SK、溝跡：SDの略号と各遺構番号を付す（例：HND-SK-1）。
2. 第1図は、トヨタ・ウッドユーホーム(株)提供の図を複製加筆し、第3図は『大田原市遺跡分布地図』(市教委 2017)を複製合成して加筆したものである。
3. 遺構実測図の縮尺は40分の1、遺物実測図は縮尺3分の1に統一し、それぞれにスケールを付した。アミ掛け部分は各図中に示す通りである。
4. 遺構平面図上の北の方位は磁北、土層図・断面図の水準線上の数値は、海拔標高を示す。
5. 遺物の番号は本文、挿図、写真図版と合致する。

## 目 次

序 例言 凡例 目次

第1章 調査に至る経緯と		第1節 縄文時代 .....	12
調査の経過 .....	7	第2節 時期不明の遺構 .....	13
第1節 調査に至る経緯 .....	7	第3節 出土遺物 .....	16
第2節 調査の経緯と概要 .....	7	第4章 総括 .....	18
第3節 調査の方法と基本土層 .....	8	第1節 土地利用の変遷 .....	18
第2章 遺跡の位置と環境 .....	9	第2節 遺構・遺物について .....	18
第1節 地理的環境 .....	9	写真図版	
第2節 歴史的環境 .....	9	報告書抄録・奥付	
第3章 遺構と遺物 .....	12		

## 表 目 次

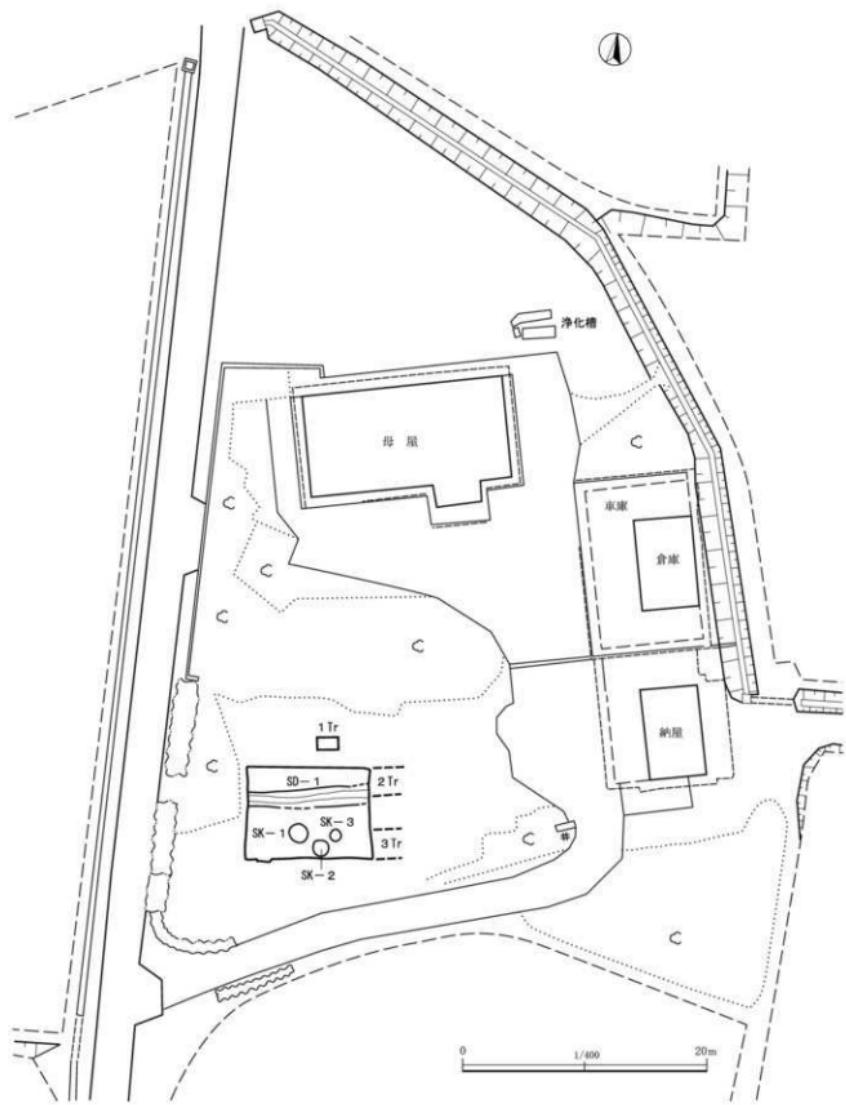
第1表 周辺遺跡一覧表

## 挿 図 目 次

第1図 確認調査の位置と調査区位置図	第6図 SK - 3
第2図 基本土層図	第7図 SD - 1
第3図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1 : 20,000)	第8図 出土遺物 (SK - 1・2, SD - 1, SX - 1, 表採)
第4図 調査区全体図	
第5図 SK - 1・2	

## 図 版 目 次

図版1 A. 調査区遠景 (南より) B. 遺構確認状況 (東より) C. 調査区全景 (北東より) D. 調査区全景 (南西より) E. SK - 1 完掘 (南より) F. SK - 1 土層 (南より) G. SK - 2 完掘 (南より) H. SK - 2 土層 (南より)
図版2 A. SK - 3 完掘 (南より) B. SK - 3 土層 (南より) C. SK - 1 ~ 3 完掘 (東より) D. SX - 1 完掘 (北より) E. SD - 1 完掘 (南西より) F. SD - 1 土層 No.1 (東より) G. SD - 1 土層 No.4 (西より) H. 基本土層 (北より)
図版3 出土遺物 (SK - 1・2, SD - 1, SX - 1, 表採)



第1図 確認調査の位置と調査区位置図

## 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

大田原市花園地内に所在する「花園中ノ平遺跡」は、昭和37年に行われた遺跡分布調査において、約5haの広範囲にわたる縄文時代の集落跡としてすでに捉えられており、『栃木県埋蔵文化財地図』(平成9年)では「中ノ平遺跡」(県通番号1121、市町村番号6)として登録されている。本市が平成26年度から平成28年度にかけて実施した遺跡分布調査の成果をまとめた『大田原市遺跡分布地図』(平成29年)では、平成の市町村合併によって市内に同じ遺跡名が複数存在することとなったことから、地区名を冠して「花園中ノ平遺跡」(県番号1121、市番号279)と改称し、縄文・土師の遺跡として登載した。

このたび本遺跡の一角において個人住宅の建築が計画され、施工主から平成30年3月12日付けで埋蔵文化財発掘の届出があり、栃木県教育委員会から同年3月29日付けで、工事着手前に確認調査を実施しその結果に基づき本市と再度協議するよう通知があった。

これを受け、本市教育委員会では同年5月23日に確認調査を実施した。調査面積は、調査対象面積88m<sup>2</sup>のうち43m<sup>2</sup>(48.9%)であった。

確認調査の結果、地表から20~25cm下の関東ローム層上面で3基の土坑の存在が確認され、うち2基からは縄文土器の破片が出土し、当該期の遺構と推察された。この結果をもとに、施工主と協議を行い、発掘調査を実施することを決定した。

発掘調査は、市教委が調査主体者となり、市が委託した株式会社日本窯業史研究所からの調査支援を受けながら実施した。調査期間は平成30年6月12日から同年6月19日まで、調査対象面積は、確認調査で確認された土坑とその周辺部に確認調査未実施部分を加えた約50m<sup>2</sup>であった。

発掘調査の結果、縄文時代の土坑2基、時期不明の土坑1基、溝跡1条の遺構が確認され、縄文土器(中・後期)が浅型コンテナ1箱分出土した。

整理作業及び報告書の作成は、発掘調査の支援に当たった株式会社日本窯業史研究所に委託し、同研究所は市教委が指導する下で、平成30年11月16日から平成31年1月31日まで実務に当たり、本書の刊行に至った。

### 第2節 調査の経過と概要

調査対象地は、建築予定地のうち過日の確認調査に際して遺構の所在が認められた3Tr部分と、2Trと3Trの間の未調査部分で計50m<sup>2</sup>である(第1図)。

平成30年6月12日に器材・仮設トイレ・重機の搬入を行う。重機による表土除去・残土処理・雨水対策を行い、午前中で重機作業は終了した。その後、人力による遺構確認作業に入り、遺構精査と確認状態の写真撮影を行った。調査区は、水田・畑地・庭地として利用されてきた為、表土層が薄く、抜根・耕作痕・ゴミ穴等の擾乱が随所に見られた。

遺構は、確認調査によって所在が知られた土坑(SK-1~3)の他に、調査区北端に長さ10mに及ぶ細長い掘り込みが確認された。確認調査2Trとの境付近に所在し、2Trでは確認されなかつものである。調査区の北壁直下に北側の立ち上がりが認められ、溝跡(SD-1)と判断された。その後、SK-3・1・2の順に順次調査・記録を進めた。雨天続きが予想された為、14日に一旦現状での全景写真を撮影した。16日、天候が回復した為、調査区を若干北側に拡張してSD-1の北側上場を追求した。北側は確認調査2Trに認

められた広範囲な擾乱があり、遺存状態は良好では無かった。また、SD-1 東端の土層記録が未了であった為、精査・写真撮影を行う。調査区南西隅に、基本土層を観察・記録用のテストピットを設け、礎主体の層を目安に掘削し、写真撮影を行った。17 日は、基本土層及び SD-1 東端の土層を実測後、平面実測を行った。同日午前中に、建主（地権者）の谷口家の皆様が見学、遺構・遺物をご説明する。18 日、調査区の消掃を行い全景写真的撮影をした。その後、平面実測を行い終了する。器材・シート・土のうなどの片付けを行う。午前中、市教委文化振興課職員の視察が行われる。午後、翌日の埋戻しに備えて重機を搬入する。19 日は、朝より埋戻し作業に入り午前中で終了した。市教委職員が埋戻しを確認の後、谷口家に野外調査終了の報告を行う。器材と重機を撤収、翌 20 日に仮設トイレを撤去して全ての野外作業を終了した。

整理・報告書作成作業は平成 30 年 11 月 16 日より開始し、平成 31 年 1 月 31 日に終了した。

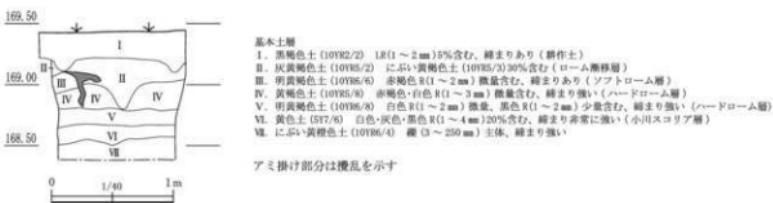
今次調査で確認された遺構は、縄文時代中期末葉～後期前葉の土坑 2 基（SK-1・2）、時期不明の土坑（SK-3）1 基と溝跡（SD-1）1 条である。遺物は、SK-1・2 は上層より縄文土器片が出土し、SK-3 は皆無であった。SD-1 も埋積土上位より縄文土器片が出土したもの、埋積土の状況などから本跡に帰属するものでは無いと判断された。したがって、SK-3、SD-1 は時期を明確にし難いが、掘削の状態や埋積土などから中世以降の施設と推察された。

### 第 3 節 調査の方法と基本土層

**調査の方法** 調査は前述の通り、重機により表土を除去し、人力による遺構確認作業に入った。確認された遺構は、土坑類は半裁、溝跡は中軸に直交するセクションベルトによって土層観察・記録の後完掘して写真撮影、実測等の記録を行った。平面図、土層・断面図とも縮尺 20 分の 1 で作成した。平面図は光波距離計で計測し、手書きで方眼紙に記入し、土層・断面図は計測・記入とも人手で行った。断面実測は海拔標高を使用した。平面実測は調査区形状に合わせた任意点で行い、全体図に周辺の地境杭を記録した。

写真撮影は、35 mm 判の白黒・カラーリバーサルフィルムを使用し、デジタルカメラで補足した。撮影には三脚及び大型脚立を利用した。

**基本土層** 調査地は第 2 章に記した通り、那須野が原扇状地の南端部に位置し、同扇状地の南限を画する等川の北方約 800 m の段丘（那須野面）に位置する。調査区南西隅の状態を第 2 図に示した。水田・畑地として利用の為、厚さ 20 cm 程の表土層直下が遺構確認のローム漸移層であった。以下、基盤層となる礎主体の層を目安に掘削したが、その直上に小川スコリア層の堆積が認められた。今次調査で確認された縄文時代の土坑は、この礎主体の層を底面とするか若干掘り込んでいる程度であった。



第 2 図 基本土層図

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

本遺跡は、栃木県大田原市花園地内に所在する。栃木県は関東平野の北端に位置し、大田原市は県域の北部、八溝山地と那須野が原扇状地にある。また、北は那須町、北西に那須塩原市、南に那珂川町・さくら市、南西に矢板市と境を接する。

八溝山地の西麓を南流する那珂川は、茨城県下を通過して太平洋へと注ぐ。したがって、県内で唯一直接太平洋に注ぐ河川として、古くから文化・経済の流通経路として活用されており、下毛野国における那須地区の特殊性を生じさせた。

市域の多くはこの那珂川と篠川に挟まれた那須野が原扇状地上に立地し、本遺跡もここに所在する。遺跡の所在する花園地区は市街地の南東方約6.4km、篠川左岸の段丘上に立地し、南東方約0.9kmで篠川とその支流蛇尾川が合流する。本遺跡は南北約350m、東西約380mと広大なもので、東脇を不動川が南流し、西脇を南流する町井川は遺跡の南で流れを東に変え、ともに蛇尾川に合流する。

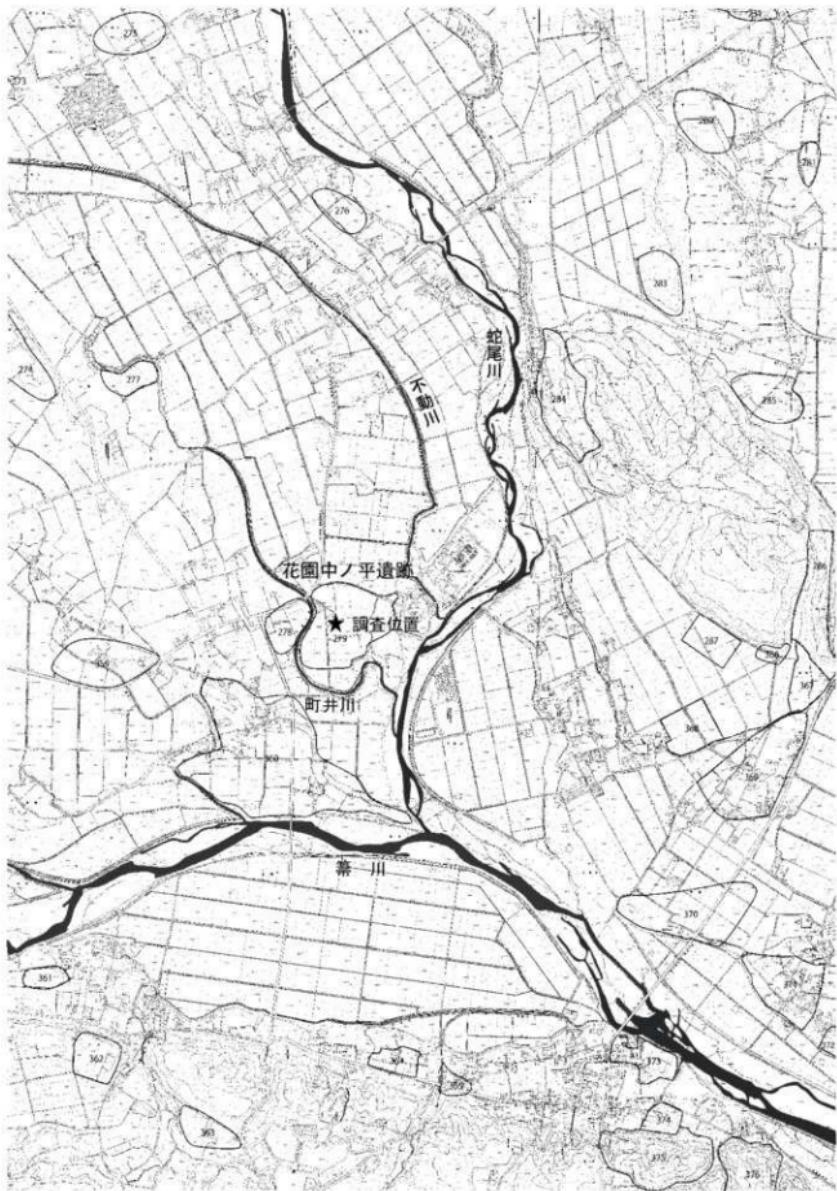
今次調査区は遺跡の中央やや北西寄りに位置し、篠川の北方約0.8km、標高170m程の段丘面（那須野面）に所在する。現在は宅地に隣接する畠地で、調査直前までビニールハウスが建てられており、かつては水田耕作が行われていたことがあったとのことである。

### 第2節 歴史的環境

大田原市は、平成17年、湯津上村、黒羽町の編入合併により新生「大田原市」が誕生した。旧大田原市では周知の遺跡は46ヶ所程度であったが、この合併により合計289ヶ所となり約6.3倍に急増した。さらに、平成26～28年にかけて実施された「遺跡詳細分布調査」により合計458ヶ所となり、さらに1.5倍に増加した。その後も若干の増加があり、平成30年12月現在460ヶ所となっている。

当市の遺跡としては学史にのこる、徳川光圀公の命による上・下侍塚の発掘や那須国造碑の保護活動が想起される。しかし、数字の上では縄文時代の遺跡が247ヶ所と全体の約半数以上を占め、このうち160ヶ所は縄文時代単独の遺跡であることが特徴であろう。本遺跡もその一つであり、旧市の頃より所在が知られていたが、前記の遺跡詳細分布調査によって推定エリアが拡大され、今次調査の契機となった。また、第3図に示した近隣の遺跡分布図に見られる遺跡の半数近くは新規発見の遺跡であり、周知の遺跡についても本遺跡と同様にエリアの拡大、変更の計られたものが大部分である。第1図・第1表に示した通り、近隣の計33遺跡のうち縄文時代の遺跡は22ヶ所と全体の3分の2を占める。また、時期を特定出来ない為、土師と記載されたものを含めた、古墳～平安時代の遺跡も19ヶ所（時代毎の重複カウントの為、遺跡総数とは合致しない）と半数以上を占め、本遺跡もこれに含まれる。さらに、城館跡・寺院跡などの中世遺跡が6ヶ所と多く見られるのも、那須氏と縁の深い当地の特質であろうか。

なお、近隣の遺跡で特筆されるものに、蛇尾川を隔てた北東方約1.2kmの片府田富士山遺跡がある。平成23年に市道整備事業に伴い遺跡の西端部が発掘調査された。扇状地に島状に点在する残丘上に立地しており、遺構集中部分は今次調査区より約30～32m高く、標高200～202m程であった。主体は縄文時代中期の集落跡で一部後期まで継続する。確認された遺構は、堅穴建物跡18軒（建替えを含め22軒）、袋状・円筒形などの各種土坑類169基、小穴630基などである。当該地区における拠点的集落跡の1つと考えられる。また、



この遺跡からは旧石器時代から縄文時代草創期に属する石器群が出土し、貴重資料が得られた。本遺跡も規模的には拠点的集落跡の可能性をもつが、今後の調査成果の蓄積に期待せざるを得ないのが現状である。

#### 参考・引用文献

- 大川 清・鈴木公雄・工樂善通 1996 『日本土器事典』 雄山閣出版
- 大田原市教育委員会 2017 『大田原市遺跡分布図』 大田原市埋蔵文化財調査報告第3集
- 後藤信祐 1996 『櫛沢遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第171集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 栃木県教育委員会事務局文化課 1997 『栃木県埋蔵文化財地図』 栃木県教育委員会
- 塙原孝一 1994 『三輪作町遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第143集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 塙原孝一 2008 『小鍋前遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第313集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 塙原師也 1992 『品川台遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第128集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 塙原師也 1997 『淨法寺遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第196集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

第1表 周辺遺跡一覧表

市番号	県番号	遺跡名	時代	種類	市番号	県番号	遺跡名	時代	種類
273	609	萩野日照跡	中世	城館跡	361	9114	大神久保畠遺跡	縄文	散布地
274	8355	長峰山遺跡	縄文	集落跡	362	9115	大神前山遺跡	縄文	散布地
275	9078	川毛遺跡	縄文・土師	散布地	363	9116	打越遺跡	土師	散布地
276	9079	中居樹形遺跡	縄文	散布地	364	9117	馬場道北遺跡	土師	散布地
277	9080	愛宕浦遺跡	土師	散布地	365	9118	道本檍遺跡	縄文・土師	散布地
278	9081	三色手遺跡	縄文・土師	散布地	366	1197	原山遺跡	縄文・平安	散布地
279	1121	花園中ノ平遺跡	縄文・土師	集落跡	367	9119	戸合遺跡	縄文・土師	散布地
231	9055	一本松遺跡	縄文	散布地	368	1199	寺の後遺跡	縄文・奈良・平安	散布地
280	9082	兼平Ⅰ遺跡	縄文・土師	散布地	369	1200	上造野遺跡	平安	散布地
281	9083	兼平Ⅱ遺跡	縄文	散布地	370	1201	岡林遺跡	縄文・弥生・平安	散布地
283	9085	猿平遺跡	縄文	散布地	371	1209	山の神遺跡	縄文・古墳・平安	散布地
284	1194	片桐田富士山遺跡	旧石器・縄文・弥生	集落跡	372	9120	堀の内遺跡	奈良・平安	散布地
285	9086	小坂下遺跡	土師	散布地	373	1124	北岡城跡	縄文・中世	城館跡
286	1198	羽黒山遺跡	縄文・土師	散布地	374	1125	千手院跡	中世	寺院跡
287	1196	片桐田館跡	中世	城館跡	375	1126	千手院裏城跡	中世	城館跡
359	9113	沼遺跡	縄文・土師	散布地	376	1127	福原城跡	中世	城館跡
360	1122	小穂島遺跡	縄文・平安	集落跡					

## 第3章 遺構と遺物

今次調査では、縄文時代の土坑2基、時期不明の土坑1基と溝跡1条を確認した。遺物は、縄文時代の土坑及び前記の溝跡などより縄文時代中・後期の土器片が68点(73片)程出土した(確認調査・表探遺物を含む)。

### 第1節 縄文時代

該期の遺構は前述の如く、土坑が2基で、ともに円筒形の貯蔵穴と考えられるものである。双方とも土器片が出土している。

#### SK-1 (第5・8図、図版1・3)

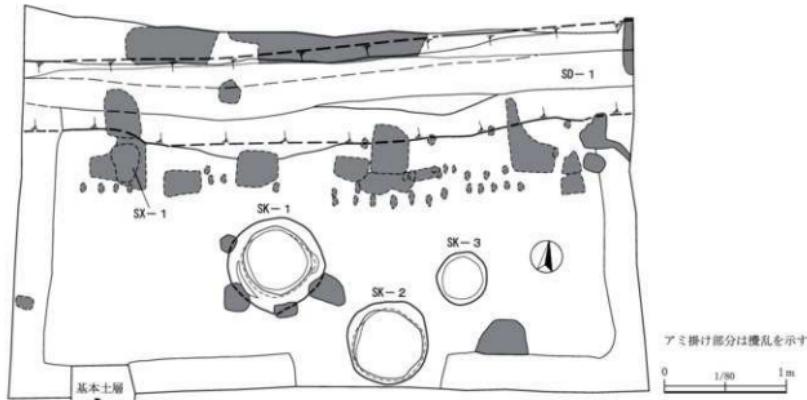
**遺構** SK-2の北西約80cmに隣接する。平面形・規模は、開口部が径170×153cmのほぼ円形、底面は径約120cmの円形である。深さは80~86cmで、礫主体の層を幾分掘り込んでいる。西側がやや深いが、使用時には整地して(第6層)、ほぼ平坦であったと考えられる。壁は上部が外反し、下位は僅かにオーバーハンプする。埋積土は6層に大別され、主体を占める第4層は礫やローム粒・塊を含み、人為的埋没と考えられる。また、上部は自然埋没と見られ、土器片を多く包含していた。

**遺物** 埋積土の第1層より縄文土器小片が20片程出土している。

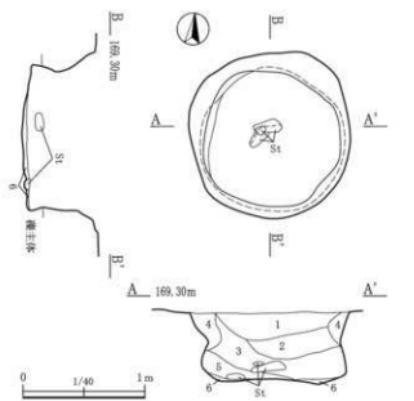
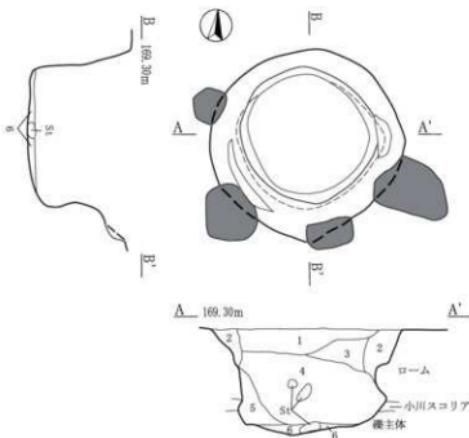
#### SK-2 (第5・8図、図版1・3)

**遺構** SK-1の南東約80cm、SK-3の南西約50cmに隣接する。平面形・規模は、開口部が径137×132cmの円形、底面は径115×112cmの円形である。深さは54~60cmで、底面は礫主体の層の上位を利用し、幾分凹凸が見られるものの、使用時には整地されていた(第6層)と推察される。壁は上部がやや外反し、下位は僅かにオーバーハンプしていた。埋積土は6層に大別され、自然埋没と考えられる。

**遺物** 埋積土の第1層より縄文土器片が15片程出土した。また、第3・5層中に大型の礫が認められ精査したが、自然石と判断された。



第4図 調査区全体図



第5図 SK-1・2

## 第2節 時期不明の遺構

本節で取り上げる遺構は、円形で比較的浅い土坑が1基と東西に延びる溝跡が1条である。また、遺物は溝跡より縄文土器片が8点程出土したが、これらは流入品と判断される。

### SK-3 (第6図、図版2)

**遺構** SK-2の北東約50cmに隣接し、北約2.8mにSD-1が所在する。平面形・規模は、開口部が径87×80cmの円形、底面は径69×67cmの円形で、ほぼ平坦であった。深さは22cmで、壁は直立ぎみに立ち上がる。埋積土は4層に大別され、上位中央部の第1層には厚さ1～2mmの薄い灰層が断続的に認められた。また、

南壁には径5cm程の範囲に灰の付着が認められ、直接被熱を受けた痕跡や焼土の混入などは見られなかった。

**遺物** 前述の通り遺物の出土は皆無であり、帰属時期は明確にし難いものの、埋積土やしっかりした掘削形状などから遺構とした。

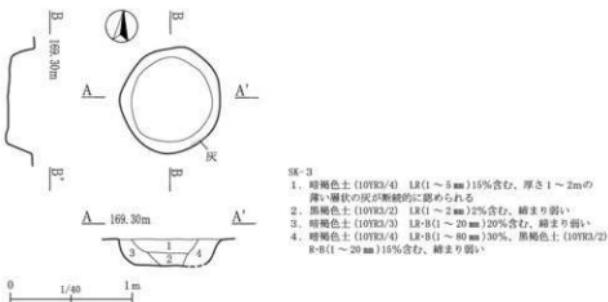
#### SD-1 (第7・8図、図版2・3)

**遺構** 調査区北端に所在する東西溝である。確認調査2Trと今次調査区の接点付近に遺存したことから、遺構確認当初は判断に苦慮したが、調査の進捗に伴い溝跡と判明した。規模・形状は、上幅が1.2~1.5m、底幅が0.5~0.6m、深さ0.25~0.3mの断面が逆台形状で、現存東西長約10mを確認し、両端はそれぞれ調査区外に延びる。幾分蛇行していく厳密では無いが、中軸線はN-80°-Eを示す。溝底は西から東に向かって緩やかに下降し、調査区内における比高は10cm程である。埋積土は2~4層に大別され、人為的埋没の後、自然埋没と考えられる。また、東西両端の土層観察では、埋積土の直上には水田耕作に起因するとと思われる硬化した土層が認められた。

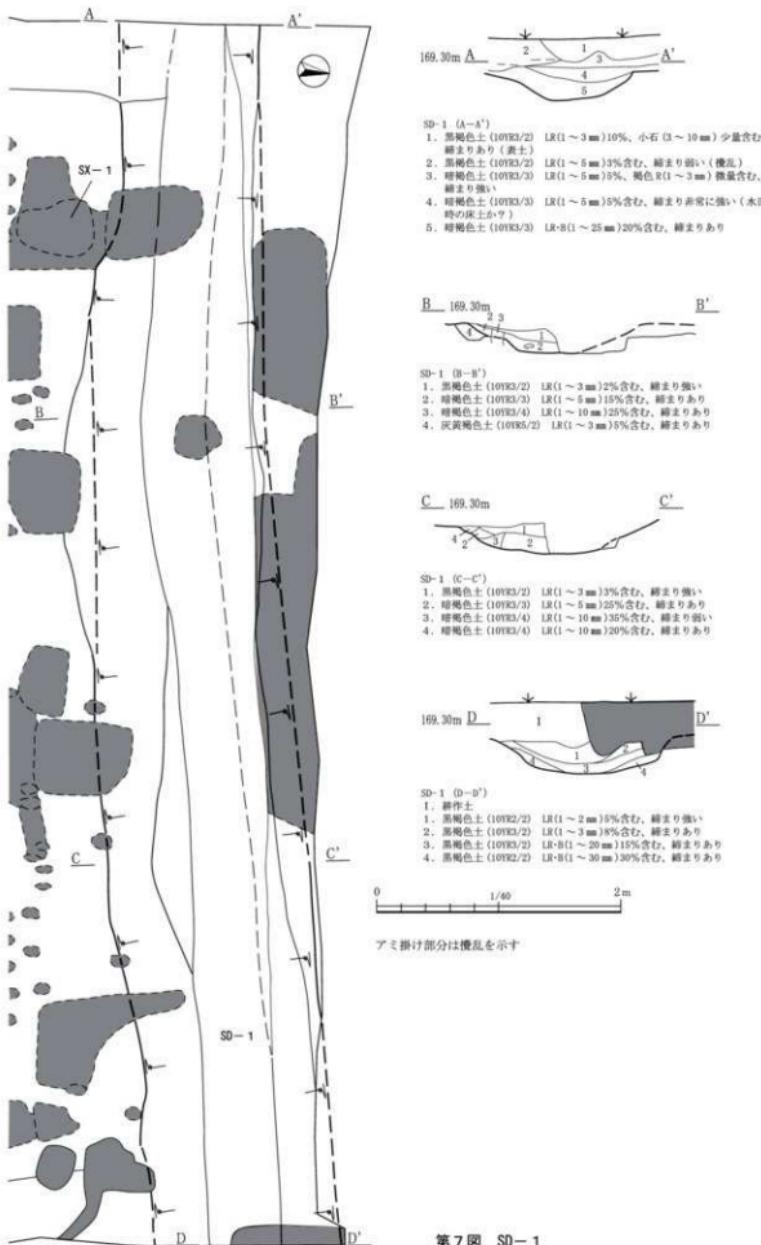
なお、家人に溝跡の存在について尋ねた所、「水田として耕作していた頃には、この付近に水路があったかもしれない」とのことであった。しかし、溝底を精査したが、水流を示すような堆積物や鉄分の沈着などは認められず、水路とは異なる用途の溝と考えられる。また、時代的にもそぐわないと思われる。

**遺物** 埋積土上位の第1層中より8点程の縄文土器小片が出土したが、埋没途中の流入品で、本跡の時期を示すものでは無い。

これら他に数基の小穴・土坑状のものを確認し追求したが、いずれも擾乱及び樹木の根跡などと判断された。また、SX-1としたもの(第4・8図、図版2・3)も、縄文土器片が出土したことから精査したが、埋積土や形状から樹木の根跡と判明した。



第6図 SK-3



### 第3節 出土遺物（第8図・図版3）

今次調査で出土（表面採集を含む）の遺物総数は68点（73片）で、その殆どが縄文時代中・後期の土器であったが、土師器の細片が3点認められた。出土位置毎に以下に概述する。

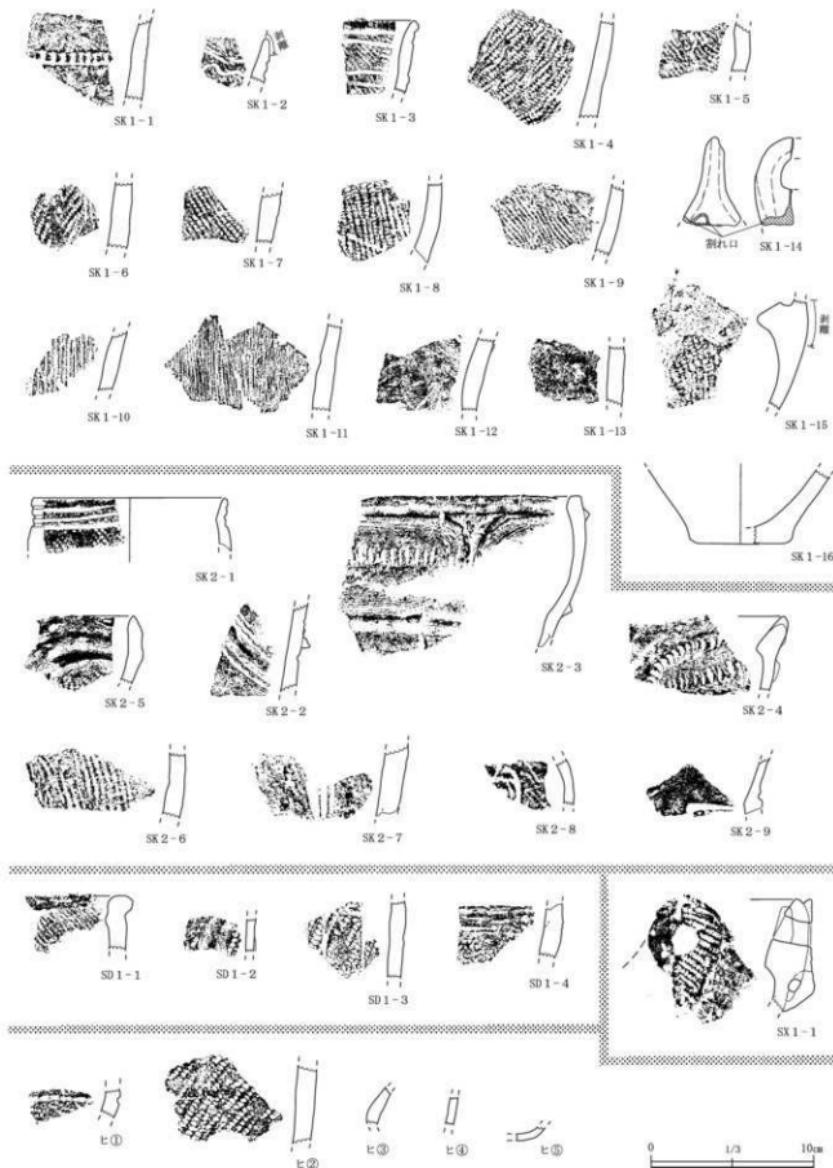
**SK-1** 縄文土器が20点（21片）出土し、この内16点を図示した。中期前葉の阿玉台IV式期と見られるもの（1）、大木8a式期のもの（2～7）や、中期後葉の加曾利E III～IV式期のもの（8～14）も見られるが、後期初頭の称名寺・網取式期のもの（15・16）が認められ、15・16が本跡の帰属時期に近いものと考えられる。1は無文の胴部に横位の連続刺突文を廻らし、胎土に雲母片を多く含む。2・3は縄文を地文とし、2は結節沈線文と沈線による波状文を施文、3は平行する沈線を2段に廻らし、胎土に少量の雲母片を含む。14は波状口辺の波頂部の突起部分で、外面下端に沈線による施文の一部を認める。4～9は縄文を施文、10・11は条線文、12・13は無文である。4～7はLRの太目の網を縦位に施文する。15は上部を欠損するが、波状口辺の波頂部で、孔を伴う捻れた板状の突起部と考えられ、外面に縄文を施す。16は体底部片で、無文。

**SK-2** 縄文土器が12点（16片）出土し、この内9点を図示した。中期前葉の阿玉台II式期のもの（2）、大木7b式期のもの（1）、阿玉台III～IV式期のもの（3・4）や、中期後葉の加曾利E III～IV式期のもの（5～7）が見られるものの、後期前葉の称名寺式期のもの（8・9）が認められ、これらが本跡の帰属時期に近いものと考えられる。1は縄文を地文とし、口辺外面に3条の沈線を横行させる。3は平坦な口縁でキャリバー型の深鉢、断面三角形の隆帯による楕円形区画文、隆帯の内側にクシ状具によって細い条線文を廻らし、中央にヘラ状具による刻み目を充填する。2は断面が三角形の隆帯の両脇に各2条の連続刺突文を施文する。4は低く幅広の隆帯上に爪形の連続刺突文を施し、中央にヘラ状具による刻み目を充填する。2～4は胎土に多量の雲母片、1は少量の雲母片を含む。5は低い隆帯による区画内に縄文を充填する。6～8は縄文を地文とし、7は垂下する2条の沈線、8は逆U字状の区画文を施文。9は内外面にミガキを施し、括れ部に沈線による施文の一部を認める。

**SD-1** 縄文土器が8点出土し、この内4点を図示した。中期中葉の加曾利E I式期のもの（1）、同III～IV式期と見られるもの（2～4）がある。1は外に突出する無文の口縁直下に縄文を施す。2は薄手で、低い隆帯による区画内に縄文を充填する。3・4は縄文を地文とし、3は縦に沈線を施す。4は沈線で区画して磨消し、無文帶を削出する。前述の通りいずれも流入品である。

**SK-1** 1は後期初頭の称名寺式期、波状口辺の深鉢で、波頂部の突起部分である。孔を伴う捻れた板状の突起である。右半分に縄文を施し、無文帶の口辺直下に円形刺突文が2列に並ぶ。前筋で記した如く遺構では無い。

**表面採集** 計27点採集し、中期前葉の大木8a式期のもの（1・2）と土師器（3～5）の5点を図示した。1は縄文を地文とし、横行する2条のキャタピラ文を施文し、雲母粒を少量含む。2は縄文を縦位に施す。3・4は壺・甕類、5は壺類と見られるが、いずれも一辺が1～2cmの細片であり詳細は明確にし難い。いずれも胎土に微砂粒を含み、焼成は良好で色調は橙色もしくは浅黄橙色である。



第8図 出土遺物 (SK-1・2、SD-1、SX-1、表探)

## 第4章 総括

### 第1節 土地利用の変遷

**旧石器時代** 本遺跡では今次調査、過去の分布調査等においても該期の遺構・遺物とも確認されていない。近隣では北東方約1.2kmの片府田富士山遺跡で石器が19点程出土している。しかし、こちらは扇状地上に点在する残丘上に立地し、扇状地段丘面の本遺跡とは立地条件が異なる。

**縄文時代** 今次調査区では該期の土坑が2基確認され、ともに後期初頭頃の貯蔵穴と推察される。また、遺物は中期前葉の阿玉台II式期～加曾利E式期（大木7b～8a式を含む）、称名寺式期のものがある。すべて破片であるが、本遺跡における該期の土地利用の状況を示すと考えられる。また、第3図・第1表に示した近隣の遺跡33ヶ所のうち22ヶ所が縄文時代の遺跡であり、市域全体における比率より著しく高い数値を示している。該期の遺跡が密集する地域であるということは、生活適地であったとも言えよう。

**弥生時代** 該期の遺構・遺物とも確認されていない。近隣でも前記の片府田富士山遺跡及び岡林遺跡で該期の土器片が出土・採集されている程度である。

**古墳～奈良・平安時代** 第3図に示した33遺跡のうち該期の遺跡と想定されるのは19ヶ所である。このうちある程度の時期を想定し得たのは6ヶ所で、他は特定出来ずに土器片との記載に留まる。今回採集されたものも、一辺が1～2cmの細片であり詳細は資料の増加に期待したい。

**中・近世** 今次調査では該期の遺物は皆無であり、時期を特定し得なかった遺構は、溝跡（SD-1）、土坑（SK-1～3）が各1ヶ所である。

### 第2節 遺構・遺物について

前述の通り、時期を想定し得る遺構は土坑が2基（SK-1・2）である。なお、当該地は扇状地の段丘（那須野）面にあたり、遺構確認面であるローム漸移層上面から60cm程で基盤層の礫主体の層に至る。SK-2は遺構の確認作業中に中期前葉の土器片が出土し、袋状土坑の可能性が推察された。しかし、調査の進捗に伴い、円筒状の土坑であることが確認された。本跡は深さ約60cmで、礫主体の層の上端部を坑底としていた。また、北西に隣接するSK-1もそれより20cm程深く掘り込んだ程度である。今次調査区に見られたような規模・形状の土坑であれば掘削が容易であるが、中期前～中葉の深くて大型の袋状土坑を掘り込むには不適な地域と思われる。阿玉台II～加曾利E I式期の土器片の出土から付近での土地利用を推察し得るもの、土坑群については掘削が容易なローム層の堆積が厚い場所を探して設置したものと考えられる。今次調査では石器類の出土は皆無であり、生活の場はやや離れているのであろうか。

なお、前節で本遺跡周辺における縄文時代の遺跡の全体に占める割合が著しく高いことに触れたが、当該地区は、丘陵地、扇状地上の残丘、中・小河川の合流点に近接する段丘面など様々な地理的立地条件をもつ遺跡が展開している。したがって、各遺跡（集落）は生産（活）基盤をはじめそれぞれの特色を持ちながら営まれていたと推考する。

時期不明の遺構のSK-3、SD-1については現時点では中世以降と推定するが、結論を得るには今後の資料の増加に期待せざるを得ないのが現状である。

本書の上梓にあたり、調査にご協力を賜りました地権者の谷口様はじめ発掘調査から報告書作成に際してご指導とご助力を賜りました各機関・各位に対して感謝し御筆する。

図版 1



A. 調査区遠景（南より）



B. 遺構確認状況（東より）



C. 調査区全景（北東より）



D. 調査区全景（南西より）



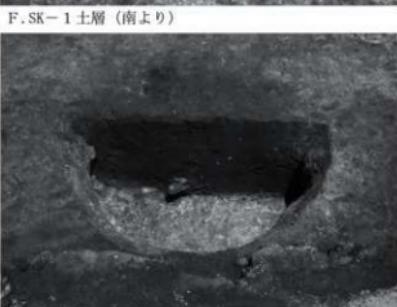
E. SK-1 完掘（南より）



F. SK-1 土層（南より）



G. SK-2 完掘（南より）



H. SK-2 土層（南より）

図版 2



図版3



出土遺物 (SK-1・2、SD-1、SX-1、表探)

## 報告書抄録

ふりがな	はなぞのなかのだいらいせき						
書名	花園中ノ平遺跡						
副書名	個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	大田原市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第4集						
編著者名	長谷川操・水野順敏						
編集機関	株式会社日本窯業史研究所						
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3112 TEL 0287-93-0711						
発行機関	大田原市教育委員会						
所在地	〒324-8641 栃木県大田原市本町1-4-1 TEL 0287-23-3135						
発行年月日	西暦 2019(平成31)年1月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ○○° 遺跡番号	東経 ○○° ○○'○○''	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
はなぞのなかのだいらいせき 花園中ノ平遺跡	さちばけんじゆくたわらしはなぞのあひ 栃木県大田原市花園字 はやしまさ 林前	092100	1121	36° 49' 11"	140° 03' 01"	20180612 20180619	約50 m <sup>2</sup> 個人住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
花園中ノ平遺跡	集落跡	・縄文時代 ・古代 ・時期不明	・土坑2基 ・一 ・土坑、溝跡各1基	・縄文土器(中期～後期) ・土師器 ・一	・箒川左岸の段丘面 での調査で、縄文 時代後期初頭頃の 貯蔵穴2基を確認 した。		
要約	・那須野が原扇状地の南端部に位置する段丘面における縄文時代の集落跡を対象とする 調査であったが、調査面積が50 m <sup>2</sup> 程と狭く、後期初頭頃の土坑を2基確認したに留まる。 この他、時期不明の土坑1基と溝跡1条が確認された。						

### 大田原市埋蔵文化財調査報告第4集

## 花園中ノ平遺跡

### —個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行 大田原市教育委員会  
〒324-8641 栃木県大田原市本町1-4-1  
TEL 0287-23-3135

発行年月日 2019(平成31)年1月31日

編集 株式会社日本窯業史研究所  
〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112  
TEL 0287-93-0711

印刷 下野印刷株式会社  
〒320-0061 栃木県宇都宮市宝木町1-28-11  
TEL 028-622-6953